

小学校サブコース演習

音楽教育講座：楠 俊明

1. 授業の目的

授業の目的は、「卒業研究に必要とされる専門分野の知識や技能等に関わる基礎的な事項について学ぶ。」である。

2. 授業の到達目標

- 卒業研究に向けて、関心のある領域・分野に関する予備的・基礎的な知識を修得し、説明することができる。
- 卒業研究に向けて、関心のある領域・分野に関する予備的・基礎的な技能を修得し、実践することができる。
- 主体的に学習に取り組むことができる。

3. 授業の位置づけ

小学校サブコース演習は後期開講、来年度の卒業研究のための本研究室ゼミ生3回生2名の受講生である。

授業概要は次の通りである。

主としてゼミ形式により、関心を深めた事柄や問題意識等を整理するための予備的・基礎的な課題研究を設定し、研究方法・研究の検討・実践等を通してその解決を図る。その際、まとめとして研究レポートを作成し、卒業研究に向けての展望が明確になる。

4. 授業の概要と計画

授業は大きく4つに分けて行くと説明して、ゼミ形式を中心に進めていった。

- ① 卒業研究に向けての自分の研究内容を話し合う。
- ② 先行研究や音楽書等を熟読し、その内容をまとめて説明する。
- ③ 好きな音楽を分析し、その説明ができるようなレポートを書き上げる。
- ④ 小学校の音楽の授業を参観し、実習で経験できなかった学びを経験する。

授業の大まかな日程構成は次のように計画した。

- 1次 オリエンテーション
- 2次 自分の音楽への思いと課題の考察
- 3次 音楽のレポートや読書
- 4次 附属小学校への授業参観
- 5次 まとめ

上記のように計画をして、教育実習との日程を鑑みて授業を進めていった。

5. 授業の実際

① オリエンテーション（1時）

この授業の内容と上記の進め方を説明して、今の音楽に関する趣向や専門等についての話合いを行った。

二人ともサクソフォーンを演奏していて、小学校教員を目指したいと考えており、共通点が多いことに話題は盛り上がった。しかし、卒業論文の話を進めると座は停滞し、しっかりと準備をしていかなければならないと感じた。先輩方の卒業論文を見せ、その思いをそれなりに発表させた。まだ二人とも思いは曖昧で、しっかりと考えて今年度末までには決めていこうとまとめた。最後に、来週からの音楽書を探しに資料室等の説明をしてオリエンテーションを終えた。

② 音楽書講読とレポート（2～5時）

音楽書を読んでそのレポートをする活動を進めた。それぞれが興味のある本を選択してその内容から面白いところをレポートする活動から始めた。始めは、読んだ感想を述べ、それに対する質問をして、内容を共有化することから始めた。

二人が選択した本は次のようなものである。「フィンランドの教育力ーなぜ、PISAで学力世界一になったのかー」「統合保育・教育現場に応用する音楽療法・音あそび」「音楽は何語？日本人はクラシック音楽をどう把握するか」

「日本童謡音楽史」

などである。

音楽書の話ができるようになって、それをレポートとしてまとめてくる活動に入った。二人のレポートを記載する。

大正初期の頃、文部省唱歌は堅苦しい、単純すぎる、という意見が多く、芸術教育としての唱歌教材にふさわしくないと言われていた。そこから吉丸一昌の「新作唱歌」や小松耕輔、梁田貞、葛原宙の「大正幼年唱歌」が刊行され童謡運動へと発展するのろしとして現れ、人々の関心を集めた。

大正7年7月、北原白秋や鈴木三重吉が中心となり童謡童謡雑誌「赤い鳥」が創刊され本格的な童謡運動が始まったとされている。しかし筆者は、創刊から成田為三の「かなりや」が掲載されるまでは童謡運動としてはまだ音楽的な面が欠けていたと述べている。それまでは児童文学運動にすぎず音楽的な面が含まれた童謡運動が始まったのは約1年後と考えるのがより正確であると筆者は言う。

そもそも「童謡」という言葉は、童謡運動の時にはどう捉えられていたかという、江戸時代から明治時代にかけては、現在のわらべ歌の意味で使われていた。「赤い鳥」では新しい童謡を「創作童謡」、わらべ歌を「各地童謡」とし童謡が二つの意味を含む言葉として使っていた。よって童謡運動ではわらべ歌を意味した童謡の語を意識的に拡大解釈して、その精神を継承しようとしたのである。

白秋は明治の小学校教育がわらべ歌を無視してヨーロッパの曲調や子供の感情に寄り添っていない唱歌を使っていることに憤りを感じ「童謡復興」の運動を展開した。これが童謡運動の真の目的である。

成田為三は童謡運動の始まりともされる「かなりや」を作曲した。単純なヨナ抜き長音階や四分の二拍子や四分の四拍子の単純なリズム構造が多く個性的な曲はさほど多くない。成田為三の欠点は詩の理解が足らず、言葉のアクセントやニュアンスの扱い方が非常に下手である。よって文部省唱歌などと音楽的には変わったわけではないため、童謡運動における彼の功績は「かなりや」であると言える。

草川信は大正10年から14年にかけて主に「赤い鳥」の童謡作曲を担当した。「風」「吹雪の晩」「夕やけこやけ」などを作曲して、曲のスタイルも目立って多様化していた。バイオリニストらしい旋律性が豊かで、感覚も柔軟なため詩のスタイルに応じて曲のスタイルも変化が見られた。よく流れる旋律性と和声法は素朴ながら自然な美しい響きを持っていることが多い。

弘田龍太郎は「赤い鳥」に多くの童謡を出した一人であるが彼の童謡作品の中で「赤い鳥」に出されたものはそう多くはないが音楽的性格から見ても赤い鳥系の作曲家として挙げている。弘田はヨナ抜き短音階の旋律の中に、都節音階の旋律法を借用した曲が有名である。この音階は近世以来の感傷的な都会情緒を完全に捨てきれなかった大正時代の都会人にとって非常に魅力的であった。ヨナ抜き長音階を使った曲の方が圧倒的に多いが、この使い方は二つの傾向があるとされている。一つ目は、幼児向けのヨナ抜き音階らしい単純素朴なタイプな歌で、童謡というより唱歌に近い。二つ目は、音の動きはヨナ抜き長音階だが、旋律のムードは感傷的な歌である。これが弘田の重要な特徴の一つである。

「赤い鳥」の童謡は北原白秋が担当していたが、わらべ歌の伝統の発展としての童謡という考えを持っていた。よって「赤い鳥」に発表される童謡の多くは、音楽的にもわらべ歌の伝統の発展としての性格を強く持っているべきであった。しかしここに挙げた3人は唱歌的な性格を強く残していた。音楽としては最も貧しい限られたスタイルの作品しか生み出さなかった。理由として当時の人々が持っていた「音楽」の概念の狭さ、日本の伝統音楽、わらべ歌の音楽的性格に対する無理解などによって音楽=ヨーロッパ音楽という考え方が無条件の前提として人々の頭を支配していた。それは他の作曲家や白秋にもその傾向があったからである。さらに「赤い鳥」が主とし

A 学生のレポートの一部

A 学生は始めからしっかりと内容を要約し、分かりやすく説明することができた。それぞれの質問にもしっかりと答え、文章で表現することに慣れていくようであった。

B 学生は一回目はどのようにまとめるのだろうかとつぶやきながら、レポートを持ってきた。順番にうまくまとめているが、A 学生のまとめ方を見て、次は違う方法でまとめていこうと話していた。B 学生の二つのレポートを記載する。二つ目は項目をたててしっかりとまとめることができている。

本書を読み、フィンランドの教育力が高い理由として、以下の四点が挙げられる。

一点目は、フィンランドの教師の水準が非常に高いことである。「教師には高い教育のレベルが求められ、決められたトレーニングを受け博士号を習得する必要がある。また高等学校の成績報告書が良くないと大学に進学することができない」と記載されている。給料があまり高位とは言えないのにも関わらず、フィンランド国民の勉強することへのリスペクトの高さや林業以外の産業がなく人的資源を大切にするという国の特徴などから、教員の職業としての人気は高く、教育学部を志願する人数も多い。そのため、教育学部に入学できるのは、志願者のわずか1割程度であり、大学全入時代の我々の世代と比較すると、教師の水準が高くなるのは自明であると感じた。

二点目は、子どもたち一人一人が本をよく読み、家庭でその内容を共有していることである。フィンランドの子供たちは、図書館で本をよく借りて本をよく読むほか、家庭での読み聞かせの文化が定着していること、また新聞の購読率が高く、家庭で社会の事象について話し合うなど、本を読み文字に親しむ行為を日常的に行っているため、フィンランドの学校外での教育の水準が高いのでは無いかと感じた。

三点目は、フィンランドが母国語を大切にしていることである。歴史的に長い間、ロシアやスウェーデンなどの諸外国の統治下にあったフィンランドでは、フィンランド人のアイデンティティ、民族主義的な意識の中で母国語を大切にするという文化が根付いた。その上、母国語がフィンランド語とスウェーデン語であるフィンランドにおいては、母国語の独自性故に隣国とのコミュニケーションを取る上で、英語を習得しなければならない。このような母国語を大事にするという風習から3ヶ国語を学ぶため、子どもの学力が高いのでは無いかと考えている。

四点目は、フィンランドで行われた教育改革によって、PISA 学習調査に大きく影響を及ぼした事である。フィンランドで行われた教育改革では、フィンランドの教師に対して現場への裁量権を与えた。フィンランドの教師は、行政や親から信頼されており、裁量権を用いて、教師が独自に考えた授業を自由に展開することが可能である。フィンランド国民が大学院まで無償で教育を受けることができるという、社会的構造もまた子どもたちの学力水準を向上させているように思う。

日本と比較して、フィンランドでは、教育自体への国民の関心が高い、また社会的構造が整っていると考えている。フィンランドの教育の優れている点はよく検討し、取り入れていく必要があるように思う。

B 学生の一回目のレポート

概要

本書では、クラリネット奏者である著者が自身の経験に基づき、日本人が西洋音楽的なクラシック音楽を演奏することの難点、その裏側にある背景などを論じている。中学校・高等学校・音楽大学などにおいて様々な指導経験もあり各地で実績を残している著者ならではの視点で、演奏する際に気をつけなければならない事や知っておかねばならない事を「妙案」と銘打って紹介している。本書は、序章から始まり、第1章「リズムを定義する」、第2章「言葉の特性が養う聴覚と行動」、第3章「日本文化から見た感情表現」、第4章「演奏における日本人特有のリズム処理」、第5章「音楽は言葉だった!」、第6章「西洋音楽に対処する原点はここに」、第7章「追首」の全8章で構成されている。著者のリズムや音響に対する研究結果が詰まっている内容となっており、音楽を演奏するすべての演奏者、そして指導者にとってのヒントが詰まっている。

西洋文化と日本文化の違いによる難点

著者は、西洋音楽の特徴として、①音程がはっきりしている。②子音・無音節が強い。③語頭・語尾をしっかりと発音する。音が強い。④細かいリズムが感じられ、リズムが明確である。⑤特にはっきりとした主張がフレーズの始めと終わりにある。⑥主音で始まり主音で終わる。主張が明確である。(積極的に情緒を表す。)⑦西洋音楽は構造的にできて

対して、日本人にはリズムやフレーズ感覚がなく、リズムを守って演奏することに不自由を感じやすいとしている。そのため、西洋音楽の定期的で、整数で割り切ったような繰り返しのリズムと明確な発音を、日本人は潜在的に不快に感じやすい。また、日本人に備わった歌心は、リズムを任意にして崩すことにあるのだと考えられ、日本人には西洋的な拍子とリズムの感覚はそもそも存在しないと考えられる。日本人が西洋音楽に取り組む際には、西洋的感覚がないということを見出し、そのことが演奏する上での障害となっているかもしれないことを考慮する必要がある。

音楽は何語であるか

第5章「音楽は言葉だった!」では、西洋音楽における各国の民族的な訛りについて言及している。「フランス人のやるブラームスは」「アメリカ人のやるベートーヴェンは」だ

B 学生の二回目のレポートの一部

③ 楽曲分析とレポート（6～8時）

音楽書のレポート作成を終え、自分の好きな音楽を文書でレポートする活動に入った。それぞれが好きな音楽の話をしてしながら、楽譜とレポートを使って説明することができていた。この活動は二人ともスムーズに進めることができていた。自分の好きな音楽と言うことと、サクソフォーンを弾いて様々な活動に参加しているため、経験を元にまとめることができたようである。その一部を記載する。

Tchaikovsky Symphony No. 6 第1楽章における楽曲分析

○楽曲分析するにあたって

自身が本楽曲を初めて聴いた時、死への迫体験をしているかのような重苦しさや衝撃を受けたことを覚えている。今回の楽曲分析では、「第1主題」に焦点を当て、この第1楽章が美しい旋律の中になぜ重苦しさ、息苦しさを感じるのかを考えたい。

○本楽曲について

本楽曲は、1893年にピョートル・チャイコフスキーが作曲した最後の交響曲である。副題には、「熱情」や「強い感情」を表す「патетическая」（パティエーチェスカヤ）が記されている。この副題は、日本では「悲愴」と訳され広く親しまれている。

○第1楽章の構成

第1主題は、一見すると「長大な序奏部+アレグロ主部+序奏部の再現+コーダ」という構成のソナタ形式であるように見えるが、実際には「第1主題と第2主題が登場する提示部」→「第1主題による展開部」→「第2主題による再現部+コーダ」という構造となっていると考えられる。これはソナタ形式の原理である、第1主題と第2主題の明暗の対比によって展開する形式であると捉えることができる。

○第1主題について

第1主題は、冒頭からファゴットの独奏によって登場する。口短調の響きの中でppで極度の緊張感を持って始まるこの旋律は、聴衆に重く重苦しく息苦しい印象を与えるだろう。なぜ冒頭の主題の提示はこれほどまでの緊張感をもたらすのかを考えたところ、この部分には暗い印象を与える二つの仕掛けが存在しているのではないかと考えた。

1つ目の仕掛けは、ファゴットソロの下で奏でられるコントラバスの半音階的下降である。この半音階的下降は、短2度の下降の連続と捉えることができる。バロック時代の修辭音形に、短2度の上昇または下降の音型の「Passus duriusculus」というものがある。「Passus duriusculus」は「辛苦の歩み」と訳されており、苦難の歩みを表す修辭音型である。この「Passus duriusculus」がコントラバスによって弱音で用いられることで、第1主題の提示に重苦しさや緊張感を与えているのではないかと考えている。

2つ目の仕掛けは、主題の中に「嘆息の動機」と言われる2度下降音程の音型を用いていることである。嘆息の動機とは、「Passus duriusculus」と同様にバロック時代に用いられていた修辭音型であり、溜息を表す音型としてバッハの作品などでよく見られる音型である。2、3、4小節目に着目すると、2小節目の1拍目から2拍目にかけて「Passus duriusculus」、3小節目1拍目から2拍目にかけて「嘆息の動機」、そして4小節目の1拍目から2拍目にかけて「Passus duriusculus」によって構成されていることがわかる。第1主題の持つ重苦しく緊張感のある旋律は、バロック時代の修辭音型が効果的に用いられることによって成り立っているのではないかと考えている。

楽曲分析レポート

この曲に対する思い入れが高いため、音楽用語を使ってしっかりとレポートできている。スコアにも説明を入れて、音楽的に重要な部分を自分なりの解釈で話すことができた。質問にも丁寧に答え、楽曲分析のゼミは楽しく行うことができた。その際の、スコアも記載する。

スコアでの楽曲分析

④ 附属小学校での授業参観と支援（9～13時）

二人とも教育実習では、低学年担当であったため、高学年の様子を感得することも卒業論文を考えていく上では重要である。小学校の校内音楽会「わくわくコンサート」に向けての授業に参加させてもらえることになり、4～6年生の授業参観と支援に入ることができた。内容は次の通りである。

- ・ 4、5年のクラス合唱練習の参観
- ・ 6年の学年合唱練習の参観
- ・ 6年の合奏練習の個人練習での支援
- ・ 「わくわくコンサート」の運営支援

高学年の対応に戸惑いながらも、自分の経験をもとに楽器指導に当たっている姿が印象的であった。演奏が苦手な子にどのように教えるかを創意工夫しながら取り組んでいた。また、その発表の場である「わくわくコンサート」の運営では会場係を担当し、楽器の配置等、しっかりとその役割を果たしていた。先生チームの合奏発表にも参加し、小学校校

内行事の運営をしっかりと経験することができた。その学びから二人は低学年と高学年の違いについてレポートを書くことができた。

低学年と高学年の違い

発達段階による音楽の取り組み方への違いを、低学年と高学年の違いとして挙げたい。小学校低学年では、遊びによる学習が基本であることを、教育実習を経て学んだ。自身の授業では1年生の子どもたちに対して、ハンドサインを用いて音程を体感するというアプローチを行なった。まだ楽譜を読むことが難しく、音の高低の概念も難しいであろう小学校低学年の子どもたちには、半ば遊びのような体を使って音楽を表現するというアプローチが合っていると感じたためである。

対して小学校高学年(6年生)では、小学校低学年の遊びのような学習ではなく、一人一人が課題を見つけ、それを解決しようとする中で学習していく姿を多く見かけた。

学校行事 音楽会

先日参観させて頂いたわくわくコンサートでは教員が学校行事を運営していく中で大変な大変な部分を垣間見ることができた。わくわくコンサートまでの練習では、触ったことのない楽器を演奏したり、初めて合奏をしたりと、初めて尽くしの子どもに対して、指導や支援をどのようにしていけば良いのかということを考えさせられた。適切な教材を選定することはもちろん、指導の言葉を工夫したり、手立てをなるべく簡潔にしたるなどして、短い練習期間の中で演奏のクオリティを高め、子どもが「楽しい」「もっとやりたい」と思えることが、このような音楽会を開催する上で最も大切なことなのではないかと感じた。

また学校行事を運営していく中で、同僚である教員との協力、保護者からの理解や支援は必要不可欠のものであると感じた。音楽会に出演する学年の教員からの協力はもちろんだが、学校全体で一つの学校行事に対して一丸となって取り組む姿勢を作っていくことが、学校行事の成功として欠かせないと感じた。

<高学年と低学年の違い>

子どもとの関わりでは、低学年は先生の言うことを素直に聞いてくれるが、高学年は自我がしっかりとあるため素直に聞いてくれないことが印象的だった。低学年と高学年で言い方のアプローチを変えていかなければならないということがわかった。音楽の技術面では、低学年は楽器を使用する時は階名で歌えてからであるのに対し、高学年はそのまま演奏していた。つまり高学年になるまでに音符やリズムなどを習得していくことが必要になる。音楽の授業に限らずではあるが、先を見通した授業を行っていくことが大切であると考えた。

<学校行事 音楽会>

子どもにとっての音楽会の位置付けは、合奏や合唱を通して音楽を好きになり、そしてひとつの音楽を作り上げることを通して人間関係をよりよくしようという狙いがあると考える。お互いのことを尊重しながら一つの音楽を作り上げることで、今まで知らなかった友達を見る機会にもなる。音楽が苦手な子どもも自分の役割を認識し一生懸命頑張ることで、達成感や音楽に対する意識も変わるのではないかと考える。そういった場の一つが音楽会ではないかと思う。

運営をお手伝いさせていただいて、専科の先生が中心となって運営していたが、周りの先生方の協力がなくて難しいと感じた。周りの先生方はカメラをセッティングしたり、子どもや保護者の誘導などを行っていた。専科の先生は楽器の運搬や音楽会全体の進行、伴奏、普段の授業の中で練習など様々な仕事がある。全てを専科の先生がやっていくのは難しいため、周りの先生方の協力が必要となるのである。そのため普段からコミュニケーションを取らないといけないと感じた。日頃から連携をとっておくことで協力を得られやすく、より良い音楽会ができるようになる。教師は子どもとの関わりも大切であるが、教師同士の関わりも大事であるということも学んだ。そして音楽会を行ったあと振り返り、来年に繋いでいくことも重要であると考えた。上手くいかなかったところなどしっかりと振り返り、次に繋いでいくことでさらに良い音楽会になるのではないかと思う。よって音楽会を行ったあとでも重要であると学んだ。

附属小学校参観後のレポート

⑤ 卒業研究に向けて(14時)

音楽書や楽曲のレポート、小学校の参観と授業支援を行い、来年度に向けての論文の構想をまとめるためのゼミを行った。その段階での案を話し合いながら、それぞれの論文を

どのように進めていくかを話し合った。その際案を提示する。

テーマ① 小学校高学年の鑑賞の授業における教師の生演奏の効果について

エビデンスの収集方法(観察・アンケート)

鑑賞の授業をさせて頂く。教師が生演奏をする授業としない授業に分け、教師の生演奏の鑑賞の授業における作用を観察する。観賞の授業後にアンケートを取り、授業への意欲や観賞する事への興味にどのような違いが生まれるかを集計する。

テーマ② 小学校高学年の合奏指導における指導法の研究

エビデンスの収集方法(観察・録音から分析)

合奏の授業において(1)個人練習→合奏を行う指導(2)パートごとで練習→合奏を行う指導など、異なる指導法を各クラスで実施し、最終的な合奏の仕上がりと特徴について考察する。

<テーマ1> 鍵盤ハーモニカの運指指導

鍵盤ハーモニカの運指に関する授業を行い、授業を行う前と後で比較する&アンケートをとる。

案① 子どもたちで運指を考え、自分なりの運指で演奏する。

案② 先生と一緒に教科書通りの運指をゆっくり覚え演奏する。

案③ 何も指導せず、ひたすら演奏する。(教育的に良くない?)

↑どの案も、階名で歌えるところまで一緒にしておく。

<テーマ2> よさこいで使われる音楽とは?そして音楽教育とどう繋げるか。

①よさこいの歴史を文献で調べる。

②よさこいで使われる音楽の特徴やその音楽の分析をする→文献など

③よさこいの音楽を使って、小学校の音楽の授業でどう取り入れるのかを考え、実践(?)

→アンケート(郷土の音楽を取り入れたことで子どもの意識がどう変わったのか)

卒業論文に向けての構想

二人ともお互いの構想を話し合いながら、出てきた問題点はどのようにエビデンスを考えるかであった。データの変化や整合性、アンケートの是非等の支援を行いながら、構想案をまとめるゼミを終えた。「授業参観に行きたい」や「よさこい祭りを見に行きたい」など、話は楽しく進んだが決定はできなかった。4回生の卒業論文発表会をきいて、4月には決定して進めようとゼミを終えた。二人ともしっかりとした構想があり、自分と音楽との関係について、さらには小学校教諭を目

指しての未来についても話し合いができた。

⑥ 卒業論文発表会参観（15時）

来年度に向けて卒業論文を作成していくために、最後は先輩の卒業論文発表会を参観させた。二人とも、それぞれの論文に対して質問することができた。これで、この講座は終了したが、この発表参観を元に、来年度に向けての自分の思い等をまとめさせた。

学生A

先輩方の論文発表を聞いて率直に、来年同じようなことができるのだろうかと不安になった。論文発表会に行ったのが初めてだったということもあるが、あのような場で堂々と発表できることは本当に素晴らしいと感じた。自分の作成した論文に誇りを持ち、堂々と発表できるよう、来年は頑張りたいと思う。〇〇さんの論文は、愛媛大学合唱団について書かれていた。合唱団をもっと繁栄させたいという強い思いが現れた論文であると感じた。アンケートを取り、実際に実践した結果をもとに考察されていたが、コロナ禍で活動が制限されているためなかなか難しいとも思った。コロナ禍ではないときどうしていたのかも含め検討していくと良いのではないかと考えた。〇〇先生がおっしゃっていたように、外部から講師を呼んでいたという歴史もあった。よって論文は多方面に調べていき、考察していくことが大切であると学んだ。〇〇さんの論文は、「楽しい」授業とは？という内容の論文であった。指導書等で「楽しい」の定義を追究し、その後授業観察を通して、子どもが楽しさを感じる時の先生の指導法に着目していた。筋が通った論文でわかりやすく、教員になった後でも生かすことができる内容であったと思う。ただ「楽しい」という言葉が抽象的で、それを数値化したり具体化したりすることが難しいと感じた。実際、〇〇さんの論文は数値化されたデータはなく、テキストマイニングでデータ化されたものだけであった。「楽しい」が主観的なものであったため、客観的に「楽しい」を判断できるような方法でないと、より良い論文になっていかないということを学んだ。よって、正しい方法でエビデンスを集め、多方面から考察を行うことを心掛けながら、来年度からの論文作成に励んでいきたいと思う。

学生B

卒業論文を感想文にしないための、エビデンスの収集とデータの分析が、卒業論文を書く上で必要になることがわかった。データの収集方法についてそのメリット及びデメリットをよく検討することもまた大切であるように思う。質疑応答の場では、聞かれたことに対して、的確な内容を簡潔に述べないといけないと感じた。

今回の卒業論文発表会を参観することで、来年の自身の卒業論文へのイメージを具体化することができた。これまでの活動の中で、卒業論文のテーマを決めてきたが、確かなエビデンスと考察を得ることができるように、今一度テーマについて再考するとともに、データの収集方法について検討していきたいと考えさせられた。

まとめレポート

6 地域とのつながり

卒業論文の企画のための授業であるため、地域との連携は難しいが、附属小学校の校内行事「わくわくコンサート」の運営支援を行うことができた。6年生の合奏の授業では参観だけに止まらず、パート練習の支援を行うことができた。子どもたちもできるようになると喜んで練習したり、質問してきたりして、授業が活性化したようである。また、その音楽会では、受付の保護者対応や楽器準備等、学校行事の運営に参加させていただくことが

できた。小学校教諭を目指す二人にとってもより良い経験となったはずである。

7 終わりに

卒業論文を書くまでに必要なことを全て学習することはできなかった。特に、データ収集の方法やその考察等についての学習が不足していたと考える。しかし、最後のまとめに書かれてあるように、エビデンスの重要性をしっかりと捉えているので、4月から更なる学習を進めたい。ただ、小学校教諭を目指す二人にとっては、実習では体験できなかった高学年の授業を体験でき、論文内容を考えるヒントとなったことは間違いのない。また、二人でのゼミであったため、お互いの意見の相違点や共通点を考えながら進めることができたことが大きな収穫であった。体験学習を盛り込みながら論文を書くための学習を進めていけるよう、更なる授業の工夫を図りたい。

